韓国・ルーテル大学学生等の実習生受入れ

以前、法人で住居と仕事を提供し、現在大学教授となった韓国人夫妻との交流をきっかけに、韓国の福祉を学ぶ大学生、福祉業界で働いている人達の見学・実習の受入れを毎年行っている。法人の歴史や方針を説明し、施設を見学していただき、数日間の実習に入るというパターンが基本的な受入れ方法である。実習生達は、利用者への援助方法について学び、受け入れる側も異文化と接することができる。

社会福祉法人 中心会 〒243-0414 神奈川県海老名市杉久保2271-7
TEL：046-237-2052／FAX：046-237-2057

◆ 法人の概要

法人設立年：昭和28年
経営施設、事業（数）：5施設
経営施設、事業（種別）：
特別養護老人ホーム3箇所、訪問介護2箇所、短期入所3箇所、通所介護3箇所、養護老人ホーム1箇所、養護短期入所1箇所、訪問入浴1箇所、居宅介護支援1箇所、地域包括支援2箇所、生活介護1箇所、児童養護施設1箇所

◆ 法人の理念・経営方針

私たちは
○私たちが活動する地域社会において、
○自分や自分の大切な人が抱える心身の障害や生活環境上の問題によって、様々な「不自由」「生きにくさ」を現に経験し、または経験するだろうリスクを有する人々に対して、
○適切な専門性の担保された養護、介護、及びこれに関連する諸サービスを提供することを通じて、
○誰もが自分の存在に誇りを持ち、生きる喜びを享受するとともに、自分の家族や隣人の存在を素直に喜ぶことができる社会づくりに貢献します。

◆ 実施施設の概要

施設名：※法人全体
活動開始年：平成15年7月
活動の頻度・時間：1年に1回（2～4日間）
活動の対象者：韓国の主に福祉を学ぶ大学生

活動実施の背景、実施にいたった理由

以前、日本に留学して福祉を学んでいた夫妻に、本法人は住居と仕事を提供したことがある。彼らは留学を終え韓国に戻った後、ともに大学の教授職に就いた。彼らは以下の思いから、「教え子達に中心会で学ばせたい。」、と考えたのである。

①高齢化が進む日本社会において、高齢者福祉に取り組む状況を本ではなく、現場で見せたい。
②ドイツ、日本に続き韓国でも介護保険が実施された。政策や制度の良い所、悪い所を学ばせたい。
③児童養護施設における問題（戦争後の孤児問題から現在の虐待問題）を現場で学ばせたい。
④素晴らしい日本人と接することにより、日韓両国はお互いに学ぶべき点が多いことを理解させたい。民間外交を推進したい。

中心会は夫妻の考えに共感し、韓国の福祉を学ぶ大学生、福祉業界で働いている人達の見学・実習の受入れを開始した。

実施内容

毎年、韓国のルーテル大学福祉学部の学生を中心とした実習・見学希望者が来日する。来日する2ヶ月ほど前からE-mailで連絡を取り合い、実習や見学の内容を調整する。実施内容は毎年変わる。施設に宿泊し数日間実習を行なう年もあれば、見学と意見交換を主とする年もある。韓国の実習生側の要望を元に、毎年実習の内容を検討・調整した上で実習生を受け入れている。

実習生にとって必要な情報は韓国に送付し、韓国語に訳したものを事前に実習生に渡している。来日後は中心会の歴史や方針を説明し、施設を見学していただく。その後、数日間の実習に入るというパターンが基本的な受入れ方法である。

日本語を話すことができる学生は殆どいないため、引率者が通訳を行なう。引率者が実習現場にいない時は、携帯電話で引率者に連絡をとることもある。

活動効果

以下の文は、１人の実習生の感想を抜粋したものである。

「高齢者がゆっくりと身体を動かしている姿を見たら、すぐに手助けをしなければいけないと思っていた。日本のワーカーさんは、すぐには手を出さず利用者を見守っていた。利用者が自分の意思で自律した生活を送るためにはどのような援助を行なえば良いのか、残存能力を高めるためにはどのような援助をすれば良いのか、学ぶことができた。」

実習生達は日本で学ぶことにより、どう人を助けていけば良いのか、真剣に考えるようになる。言葉は通じなくても実習生は、職員が利用者とどのようにコミュニケートしてケアをしているのかを観察し、援助する視点やどこでどう手を差し伸べて援助するべきかを学んでいく。その結果、福祉の現場に就職し、活躍する人が増えている。

また実習を受け入れる側も、韓国人の実習生達と交流することにより、異文化と接することができる。

今後の課題

福祉に係る社会情勢は、日本の後を韓国が追っている状況である（急速な高齢化、介護保険の導入、児童虐待問題など）。そのような状況について、深く意見交換をしたいと思っても、言葉が壁になり、深い意見交換がなかなかできない。このような言葉の壁をどのように取り除くのかが課題となっている。

また、日韓がお互いに学びあうことが理想だが、日本が韓国に学ぶということができていない。日本型福祉の良い点、悪い点を素直に学んでもらうと共に、韓国型福祉の良い点、悪い点を学ばせてもらい、それぞれの国情にあった福祉施策を築き上げていきたい。それが日韓交流の成果になると思われる。